

まる まる

上伊那

平成29年2月3日

「かみとくれん」設立2年目を終えて

～1970年代、アメリカのある州で、約560人の知的障がい者らが集まって、施設を出て地域で暮らすことや『知恵遅れ』と周りの人々から呼ばれることについて話し合いました。そのとき、一人の参加者が立ち上がり、『知恵遅れ』や『障がい者』ではなくまず人間として扱われたい』=I want to be treated like people first と発言し、多くの共感を得たのです。～

この「people first」なる言葉の源泉は1960年代後半に生まれた理念＝「どんなに障がいが高くても普通の生活ができるように環境を整える」にありました。「社会から隔離された施設で暮らしたり、健常者から言われるままに行動したりするのでなく、自分の主張を持ち、地域で暮らしていくことが知的障がい者にとっても普通であり、そのために社会は環境を整備すべきである」という当時の障がい者隔離の社会通念からの解放と、当事者意識への回帰の機運がありました。「遅れを招く環境」によって、多くの知的障がい者は、自分がまるで価値がない者のように思い込まされて、自らの感情や考えにまったく自信が持てなくなっていました。知的障がい者がこのように失われた価値をもう一度取り戻し、人格ある人間として存在するためには、まず、自分の感情や考えを肯定し表現することに自信が持てるようになることが必要でした。こうした自己実現を後押しする文があります。

It's OK for you to feel in a certain way. 「何でも自分が感じることや思うことを大切にしていんだよ」でしょうか？この言葉は当事者に向けられていながら、周囲・社会の人々に、「あなたはあなたのままでいいんだよ」を本人が感じ、享受できる環境・社会の構築の必要性を訴えています。この環境・社会は一朝一夕にはできません。周囲の一人ひとりが理解を深め、まさに「人権感覚の感性」が人から人へ伝染するが如くに拡散していかなければなりません。この当事者意識への回帰の理念は、今日の社会にも脈々と流れ続けていて、ようやくですが、日本で合理的配慮や差別解消法の形になって現れたのだと思います。上伊那でもこうした理念が基にあって、福祉施設の「地域移行」や特別支援教育の「地域化・副学籍」を推し進めたと思えるのです。そして、その流れの延長線上に、生まれるべく生まれた連携協議会が「かみとくれん」ではないでしょうか…。

昨年12月14日「かみとくれん」の理事会には、そうそうたるメンバーが並びました、特に、医療分野から3病院から4名もの医師に参加していただいたのです。まさに、上伊那が誇る支援資源です。上伊那にはこんなにも強力な支援資源となる『人々』が存在していたことに驚きと感動を覚えます。それは是非、子ども・保護者に見せたい光景でした。困り果てて、どうしてい



いかわからず、イライラで子どもに辛く当たり、親に思いをぶつけていた子ども・保護者も、この人的資源を目の当たりにすれば、光明が指す思いになるだろう。何に困っているかさ見え見えない当人にそれぞれの能力分野で光を当て、支援課題を浮き彫りにして、できる範囲で支援を実施していく。その支援の支点が各分野から集まり、束になって子ども・保護者を支える…、これがまさに連携絵図。

「かみとくれん」の目的は、困り感への束になった支援の実現です。「設立の組織図完成で満足…」ではパッチワークを眺めるだけのようなもの、目的はセンター機能発揮の支援具現としての「サテライトシステム」の構築と活用です。センターとなる学校が、機関が力を発揮するだけでは支援の実現になりません。困っている人の身近な地域にその支援の拠点があり、必要な時に必要な支援資源ができるだけ早く活用できる…、それが目的です。今、そのための支援資源が揃いつつあります。これだけの支援資源をどう動かすか、そのコーディネート力がこれからの、協議会の主要なテーマになりそうです。改めて、上伊那の連携の良さは「顔と顔」のつながりです。機関や機能のみで繋がるのではなく、隙間を埋めるようにその思いで「人と人」が繋がります。「その子の支援課題の優先順位の高いモノから、先ずは一つを無理せずできることから」を原則に知恵を出し合うつながりです。その根っこさえしっかりしていれば時と場合に応じて、様々な連携の形を力強く編み出したり、組み合わせたりできるはずで

さあ、当事者意識の復権のため、上伊那の支援資源を存分に生かし、「あなたはあなたのままでいいんだよ」を本人が感じ、享受できる環境・社会の構築に向け、一人ひとりの課題解消へ歩を進めませんか。

かみとくれん会長 伊藤 潤（伊那養護学校）

出会うことから始めよう！

かみとくれん設置から2年目を終え、人見知りな私にも顔見知りが増えてきた。しかも、教育の枠を越えて！出会いによって心強さをいただくことができた。

一口に「連携」と言うが、顔見知りになりお互いの立場を知り合うことによって、真の連携に繋がっていくのだと実感することができた。

他機関連携・・・顔でつながりチームとなっていくことで、背負い込まず（支援を点で終わらせず）、包括的な支援へとつなげていく・・・途切れることなく支えるチームが気楽に編成できる・・・そんなきっかけを『かみとくれん』でも設定し続けたいと思っている。

また、集って刺激し合い高め合い、それぞれの現場に持ち帰る。そして、他機関連携によって得た客観的視点で支援のあり方を再構築していくことで地域の支援力があがっていく・・・そんなきっかけにもなってほしいとも願っている。



連携を目指す専門職としての心構え

4ない主義（支援会議、ケア会議内の鉄則）

- 「抱え込まない」→ニーズを地域のニーズに
- 「一人勝ちしない」→一部の専門職の成果という評価にしない
- 「けんかをしない」→一部をやり込めない
- 「押し付けない」→自分の価値観人生観を押しつけず、寄り添い続ける。

かみとくれん事務局 塩入 健（伊那北小学校）

「学校・病院間の連携について」

～学校参観を通して～

伊那中央病院 地域連携室
臨床心理士 安食 亜由美

私は、伊那中央病院で臨床心理士として働いています。

業務としては、いろいろありますが、その中でも発達の問題を持っていたり、精神面でのフォローを必要としていたりするお子さん、親御さんに対してカウンセリングや心理検査をおこなうことが増えてきています。それと同時に、お子さんや親御さんのことで小学校や中学校の先生と連携させて頂く機会も少しずつ増えてきました。

先生方から情報を頂くことは、普段私たちが病院で見ているのとは異なる子どもの一面を知ることができ、子どもをアセスメントするための重要な情報の一つとなっています。病院では、おとなしい子が学校では対人面での課題を持っていたり、病院で落ち着かない子が学校では集中して学習に取り組んでいたり、病院で見ている子どもの姿がいかに限定的であるのかを先生方のお話を聞くたびに痛感しています。先生方にとっては日常の子どもの姿が、病院にとっては、子どもを多面的に捉えるための重要な情報になっています。

また、先生方と連携させていただいている中で、子どもに対しての個別配慮や支援をお願いすることがありますが、私自身、学校現場は未知の世界であり、集団の中で特定の子どもに対して個別に支援していくことがどのくらい難しいことなのかをよく理解せずに話しているなど感じるがあります。そのため、今年度、実際に学校現場、先生方がどのような状況で子ども達と接しているのかを見せていただく機会を作って貰いました。

病院の中にいると個別で対応することが当たり前であるため、よく「個別の配慮を」という言葉を使ってしまいましたが、実際に見学させていただき、通常学級はもちろん、支援級でも病院が思い描いているような個別の配慮をするには限界があることを強く実感し、より現実に対応した支援方法を探ることの重要性を感じました。もちろん、私が見学した学校の様子もほんの一部であり、先生方の大変さを理解することはできていないと思っています。そういう意味でも、学校側の状況などを教えていただきながら、子どもさんや親御さんにあった支援を学校側と協力して探っていきたいと思っています。

病院と聞くと先生方にとってはハードルが高くなりがちだとは思いますが、病院が見ている子どもの姿はあくまで限られた時間の中で対応した時の姿です。その中で、子どものすべてを把握することは不可能ですし、どのような課題があるかを推測するのも限界があります。そのため、学校で困っているケースについては、ぜひ情報共有させていただきながら、一緒に支援について考えさせていただければと思います。限られたケースだけでなく、色々なケースで学校と病院が連携していく事で、子どもや親御さんにとってより良い支援を考えていく事ができるのではないかと考えています。

障害者差別解消法のスタートに寄せて

かみとくれん中高コーディネーター会事務局
小笠原 博文（伊那養護学校）

昨年4月に障害者差別解消法が施行され、公的機関においては合理的な配慮を行うことが義務づけられた。私も機会があるごとにこのことを話題にして、関係機関の本格的な取り組みを促してきた。今年になって現状はどう変わったのだろうか。

先日、親の会の研修会に呼ばれて参加して来た。講演会の後語り合う会が行われ、保護者の方から子どもの支援についていろんな悩みが語られた。それを語る保護者の方の表情は明るくなく、悩みの深刻さがうかがえた。学校はこうした保護者や生徒の悩みに真剣に向き合っているのだろうかと思った。LDの特性があるために、学力がありながらテストでその力が発揮できないとの悩みも語られた。しかも、その方は入試を数ヶ月後にひかえた中3の生徒の保護者であった。今まで学校は何をやってきたのかと憤りを覚えた。しかし、一方で、保護者も子どものために一生懸命やってくれているであろう先生方に、あれこれ注文を出しにくいのだろうと思われた。だからこそ、こうした同じ悩みを持つ保護者同士の集まりでは自分の本音を語れるのだろう。

さて、本年度の中高コーディネーター会は合理的配慮をテーマにして研修を行ってきた。2回目の会は高校入試にポイントを絞り、合理的配慮として何ができるのかについて話し合った。目の前の子どもを真ん中にしての話し合いは熱気を帯びた。中学校の先生方からは受け持っている生徒を配慮した意見が、また、高校の先生方からは現場の状況からできそうな合理的配慮について意見が出され、それは、まるで合意形成をしようとしている保護者と学校の話し合いのようでもあった。子どもを中心に置いた話し合いはいいものだとつくづく思った。



私達は学校をどの子ども笑顔で生き生きと生活できる場にしたいと思っている。そのためには、すべての生徒が自分の力を精一杯発揮できるような支援を私達教師が用意する必要があるだろう。それは私達が支援に困った時に子どもの苦しさに気づいては遅すぎる。できれば、もがいている子どもの苦しさに教師の方から気づいてあげたいものである。それこそがプロの教師としての仕事であると思う。障害者差別解消法はスタートしたばかりである。子どもに対して何ができるのか、関係の方々と一緒にさらに学んでいきたいと思う。